

## ケースメソッド授業の研究

川野 司

九州女子大学人間科学部人間発達学科、北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2013年11月1日受付、2013年12月19日受理)

### 要 旨

ケースメソッド授業は、次の8点に要約できる。第1にケースを使って問題に対して自ら判断し、対処する方法を学ぶ。第2にケースをもとにして、対話・討論・協議を行って授業を進めていく。第3に参加・双方向型授業であり、学生主体型授業である。第4に問題発見学習であり、それを解決していく方法を学習していく。第5に話し合い(協議・討論)を通して、新しい知恵を共創していく。第6に教員としての資質能力、実践的指導力、総合力の修得を目標としている。第7に将来出会う出来事に対して、適切に対応して的確な判断ができ、自信を持った指導ができる力量育成を目指していることである。学生による授業評価によれば、ケースメソッド授業は、興味関心を持って意欲的に取り組める満足感が高い指導法であると結論づけられる。

### はじめに

大学への進学率が50%を超えた現在、大学教育はユニバーサル段階に入った。それに伴い大学に入学してくる学生の学力は様々であり、大学教育の内容そのものが見直されている。1991(平成3)年の大学設置基準の大綱化に伴い規制緩和が取り入れられて、大学のカリキュラムが大幅に変更されるようになった。それに伴ってかつての一般教養科目が専門科目の中に吸収され各学部で行われるようになった。しかしながら、大学に入学する学生の学力実態を調べると大学によって多少の違いはあるものの、教養教育やリメディアル教育、初年時教育の重要性が高まってきた。つまりそれまでの大学では、一定の基礎・基本を備えた学生の入学を前提にしていたが、そうした前提が担保されなくなってしまった。ブランド力がある有名大学は別にしても、地方の小さな大学は学生確保という大学経営面を考慮した教育戦略を余儀なくされている。さらに2008(平成20)年中央教育審議会大学分科会制度・教育部会から「学士課程教育の構築について(審議のまとめ)」で提出された。それまでの大学改革は大学院に視点をあてたものであったが、学部教育についての審議がなされたのは初めてであった。大学の学部教育の在り方が問われ出し、大学教育の学士力の質保証が大学改革の俎上にのった。一方、2004(平成16)年に国公私立の大学・短大が大学基準協会などの認証評価機関から認証評価を受けることが義務付られており、大学教育の質保証が求められた。この認証評価機関による大学の評価は、最初は大学の施設設備など実際に大学教育を担保で

きる実質を備えているかどうかの外部質保証に視点が当てられた。その後、認証評価が次第に大学教育の実質を担っている内部質保証に移行しており、具体的な研究や教育活動において明確な計画とその効果が証明できるアセスメントが要求されるようになってきている。大学教育の大半を担っている授業に関しても学生の学ぶ意欲を重視する学生の立場からの授業改革が必要になってきた。また2012（平成24）年に中央教育審議会大学分科会より「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」の審議のまとめが提出された。そこでは、大学授業が受け身の学習から自ら学ぶという能動的・主体的な学習への転換が求められている。つまり研究は大切なことであるのは当然だが、教授（ティーチング）からラーニング（学び）がかけ声だけでなく、実質として要求されているのである。大学授業を担当する教員は専門性を有しているだけに、学生の意欲を育てその学びを促進するという教育面での授業法を実践することは努力を要する。最近では研究も大切だが、学生の学びを育てる教育に力点が置かれるようになってきた。そうした大学教育の潮流の中で、学生の活動性を高めるための討論、ワークショップ、話し合い、ICTを活用した学習などを取り入れた授業が学生の主体的な学習を育てる文脈の中で改めて注目を集めている。本稿では筆者が実践をしているケースを使用した討論型授業（以後、「ケースメソッド授業」という）について述べていく。

## 1. ケースメソッドによる教育

本稿は、ケースメソッド授業が学生の学ぶ意欲を高めるとともに、学生中心の授業を実践する視点でも効果をもたらす教育方法であることを述べたものである。このことは、ケースメソッド授業に対する学生の感想や授業評価等のアンケート結果からも言えることである<sup>(1)</sup>。

ケースメソッドによる教育の起源は、約1世紀前のハーバード・ロースクールで判例を取り入れた討論形式の授業にある。その後、ビジネススクールでも実際の会社経営状況に関する具体的ケースを使用した教育方法が取り入れられ、そのケースを基にした討論型授業へと発展したのが始まりであった。そしてこのケースメソッドによる教育は、ハーバード・ビジネス・スクール（HBS）の正式カリキュラムとなり、現在でも受け継がれているのである<sup>(2)</sup>。

欧米諸国では小学校の早い段階からクラスの仲間と話し合い、討論をして自らの考えや意見を述べる教育環境が整っているが、日本の学校では、討論をしながら授業を進めるという教育文化や風土はほとんどみられない。日本の学校では、明治5年の学制以来、小学校、中学校、高等学校、さらに大学においてさえも、それまでの過去の文化遺産を一斉に教える知識注入主義による教育観に支配されてきた。学校教育においては、基礎的・基本的な知識を授けることは重要なことではあるが、知識注入主義に基づいた指導だけでは主体的な学習の修得や新しい知の創造は難しいものである。本来、学習や学びは人や物などの関係性において構築されていくものであるから<sup>(3)</sup>、もっと積極的に主体的な学習を促進する指導法が提起

され、実践されてしかるべきだが、こうした取り組みは全国的な広がりにはなっていない<sup>(\*)1</sup>。

しかしこうした教育土壌の中にあって、1998（平成10）年の学習指導要領改訂では「生きる力」が重視され、自ら課題を見つけ、自ら考え、自ら判断して解決していく力が求められるようになった。この「生きる力」は、これまでの教員中心の授業から児童生徒を中心とした学びの学習にシフトが切られたと考えることができる。さらに2011（平成23）年の学習指導要領改訂では、「生きる力」が引き継がれるとともに、それまでの「ゆとり教育」が見直され、思考力・判断力・表現力の他に「人間力」の育成が重視されており、この「人間力」は「生きる力」と同じ趣旨であると考えられることができる。

一方、日本におけるケースメソッドによる教育は、1962（昭和39）年創設の慶応義塾大学ビジネススクール（KBS）に取り入れられたのが始まりである。慶応義塾大学ビジネススクールでは、慶応義塾大学の創設者である福沢諭吉の経営能力の育成を図る実学が根本思想となっている。また経営能力の育成ではHBSの経営者の意思決定のプロセスを重視したからである。KBSでは約半世紀にわたってケースメソッドによる経営学教育が進められているが、最初の頃は、経営学教育の分野においてさえも、ケースメソッドによる教育が十分には取り組まれてはいなかったようである。大学における研究はアカデミックな研究が大切であり、実務を扱う研究や学生の指導をする教育は、研究者としては一段レベルが低いものであるという風潮があったようである。現在でも大学教員としての評価は研究業績で判断される傾向が強いが、今後は教育面における教育業績での貢献が重視される必要があるのではないだろうか。そういう意味においては、2008（平成20）年の中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて」の答申でティーチング・ポートフォリオ（TP）が取り上げられて以来、関係者の間で注目され始めている<sup>(\*)2</sup>。

また坂井正廣（1995）は、「ケースメソッドがわが国において発展していくためには、多くの人々が、この教育方法を使用し、経営学の教授を試みてくれなければならない」と述べている<sup>(4)</sup>。その後、経営学分野におけるケースメソッドによる教育は、ビジネススクールを中心に実践されて関係者に注目されてきている。現在、法科大学院や教職大学院などの専門職大学院が設立された状況であり、ビジネススクールも専門職経営大学院に衣替えし、HBSやKBSのケースメソッドによる教育が行われている。

ケースメソッドによる教育に類似した指導として、学校における事例研究がある。事例研究は教員にとって具体的で分かりやすいし、教員自らの問題として指導のあり方を考えるこ

(\*)1 日本協同教育学会では、小学校、中学校、高等学校及び大学の教員が協同学習の原理に基づいた教育実践を進めている。

(\*)2 大学評価・学位授与機構や佐賀大学では、日本型ティーチング・ポートフォリオ作成のためのワークショップを積極的に進めている。

とができる。事例を通じて、児童生徒との望ましい指導のあり方を追究していくのである。事例研究は、児童生徒と教員および児童生徒同士の人間関係が研究の中心になっている。そういう意味ではケースメソッドによる教育が日本に導入された当初は、人間関係や感受性訓練に重点が置かれていたようである<sup>(5)</sup>。このように事例研究は学校現場では昔から行われており、主として生徒指導の研修会などで、教員がこれまで指導してきた児童生徒の指導経過を時系列で報告する場合に多く用いられている。事例研究は、児童生徒の具体的事例を取り上げる点ではケース教材ではあるが、教員としての指導のあり方の善し悪しを研修することに主眼が置かれている。

一方、ケースメソッドによる教育は、ケース教材を使用する点では事例研究と同じではあるが、事例研究で考えられている事例の児童生徒に対する指導の善し悪しやあり方そのものを研究することではない。ケースメソッドによる教育は、ケース教材を使って学ぶ活動を研究する教育方法である。換言すれば、学校教育に関するケース教材を使って、コミュニケーション活動を活発にする討論型の授業スタイルであり、話し合いを中心にした学習活動であるといえる。討論や話し合いを活発にするために、ケース教材を学生が事前に学習し、授業では学習した内容をもとに、グループ討議から全体討論へ進めていく教育方法である。討論を中心にした授業形態であるだけに、グループ討論およびクラス討論でのディスカッションリードの役割が大切になってくる。特にクラス討論ではグループ討論を行った後の討論であるだけに、討論をいかにリードしていくかが教員の大切な役目である。

また医療や看護の分野では、患者の具体的な臨床事例を取り扱うケーススタディの研究が進められている。医療・看護分野で活用されるケーススタディは、広い意味でのケースメソッドによる教育と考えられる。このようにケースメソッドによる教育は、法学、経営学、医療・看護学などの専門領域ではケースを用いた効果的な教育方法として開発されてきたが、教育学分野ではほとんど応用がなされていない現状である。一部の学校現場では、ケースメソッドによる教育としての教員研修<sup>(6)</sup>が行われているが、そうした取り組みはまだマイノリティである。

教育学分野におけるケースメソッド授業はあまり実践されていないが、授業の進め方は協同学習やLTD話し合い学習法と類似の教育方法である。協同学習に関しては、すでに日本協同教育学会があり、協同学習に関する研修が行われている。筆者はケースメソッドによる教育がもっと活発に取り入れられる必要があると考えており、そういう意味でもケースメソッド授業に関心を持つ教員が増えることを願っている。大学でのケースメソッド授業の実践を通して、学生の学びを育て、学生が授業を楽しく感じる点では、ケースメソッド授業は確かに効果的である。大学では教員中心の講義型授業が多いけれども、学生中心の学ぶ意欲を喚起する授業改善を図るためには、学生主体型授業に転換することが必要である。現在の大学教育においては、学生の学びを育成する授業のあり方が求められている。

そこで、教員主導の講義型授業から学生主体の学びを重視した授業を進め、自らの授業改善を実践するために、ケースメソッド授業による討論・話し合い・協議を取り入れた学習法を「ケースメソッド授業の研究」としてまとめてみることにした。学生中心の授業づくりは今後ますます必要性が高まっていくであろう。授業での学生の話し合いや活動を高めるためには、大学におけるFD推進上からも重要である。ケースメソッド授業は、学生主体型授業を実践していく際に、多くの有益なアイデアを提供してくれることを実感している。

ケースメソッド授業で使用されるケース教材は、学校現場で実際に生起している内容をケースとして取り上げた。ケース教材は問題提起の役割を担っており、ケースに見られる問題に対して、学生が自分ならどのような判断や決定をしたらよいかを考え、その根拠や理由を提示していくのである。特に教職課程を履修する学生は、将来の教員を目指しているので、学校現場で発生する問題への興味関心は高く、学生自身にとってもケース教材は自らの問題として考えやすい。またケース教材を使用することは、学ぶ意欲を育てる視点からも効果的である。学生はケース教材を前にして、どのような問題がケースに見られるのか、どのように問題を分析し、結論を出していくか、自分ならどのように対応するのかなど、多くの要因をケースの中から見出していく必要に迫られるからである。

ケースメソッド授業は、ケース教材を中心に、教員と学生および学生同士が討論や話し合いを行いながら、ケースの問題点を解決していく教育である。教員は学生同士の討論を参観しながら、話し合いグループにオブザーバーとして参加してアドバイスやコメントを述べることもある。そしてグループ討論が終わると、クラス全体での話し合いや補足説明に入る。ここでは教員には、各グループで話し合われた具体的内容について、クラス全体の共通話題として取り上げるコーディネータとしての役割が重要になってくる。

## 2. 教職課程におけるケースメソッド授業

教職課程を履修する学生は、校種の違いはあるにしても将来は教職に就くことを切望している。一方、教員志望ではないけれども、教員免許状を一つの資格として取得したいと考える学生もいる。教員志望の学生は、小中学校の教員になることを目指して、教員採用試験の準備に取り組んでいる。また大学教員も学生の夢が叶うように教員採用試験のための正課外での講座等の指導を行っている。教職を目指す学生に対して、何を期待するのか、どういう力を育て、どのようにして学生の学ぶ意欲を培うのか等の明確な指針があれば、そうした資質能力を修得させる指導は可能である。その指針の一つがケースメソッド授業である。ケースメソッド授業は、教職に就く学生のための授業方法としては、十分に効果があり、学生の学びを育てる授業に相応しいものであるといえる。

教員に求められる資質能力は、これまでに中央教育審議会等で何度も取り上げられている。「教育者としての使命感」「人間の成長・発達についての深い理解」「児童生徒に対する教育的

愛情」「教科等に関する専門的知識と豊かな教養」、そしてこれらを基盤とした「実践的指導力」が教員の普遍的な資質能力とされている<sup>(7)</sup>。また実際の学校現場では、教員は教育課題に果敢に挑んでいくとともに、指導と教育において新しい何かを創造できる力量が必要である。学校に勤めるようになると、児童生徒の教育指導がその日から始まる。保護者や地域および学校の組織体制に関わる問題に出会うことも多くなる。そうした問題や課題の解決が困難に思える場合も出てくるが、教員となったからには、それに挑み、新しい教育を創造していかなければならない。新しい教育実践が創造できるためには、教員として直面している問題点を明らかにし、その問題点をどのように把握し、どのような手法を用いて解決していくかのマネジメント力も必要となる。こうした問題や課題を適切に処理する力は、ケースメソッド授業を通して訓練できる。

そのためには、学校現場の教員が経験する具体的事例を扱った内容で授業を進めることが一つの方法である。教員が遭遇する問題事例に対して、どのような対応を取っていくのかについて、学生自らが教員の立場になって考えることが必要になってくる。自分ならどのようにして問題を解決するのか、その問題の本質はどこにあるのかなどについて、事例を手掛かりにしながらかつ自ら解決の方策を探っていくのである。そこではまさに学生自身が自ら考え、自ら判断し、自ら行動し、自らの課題を解決していく実践力が要求されているのである。そういう視点から言えば、学校現場の事例を取り上げ、それに対する自分の判断が正しいのか、それとも不十分であり間違っているのか、他の人から学べることはないのかなど、教員の立場で思考訓練をすることは大切なことである。しかも事例に関する教員と学生および学生同士の討論を通して、自分の考えや意見を発表し、考えを練り修正を図っていくプロセスは、学生の学びを育てるうえでは重要なことである。

そこで、どの学校でも起こり得るようなケース教材を考え、学生には次週の授業で発表し討論するために事前にケース教材を予習課題として与えた。自分ならば、そのケースにどのように対応して、解決策を出していくのかを自ら考えさせるものである。学生自身がケースの問題点を考えやすいように3つの設問を設け、その設問を中心に事前学習を行い、自学した内容を授業当日までにケースレポートとして提出するようにした。ケースレポートを作成する過程を通して、学生はケース教材について十分に自分の考えを整理しておくことができ、そのことによって、グループ討論や全体討論が活性化するのである。多くの学生は熱心にケースレポートを作成しており、予習や調べ学習を継続していくことで、自らの学びを深めている。

### 3. ケースメソッド授業の目標

ケースメソッド授業は、教員としての実践的指導力を身に付けるための訓練をすることを目標にしている。学校で日常的に見られる児童生徒を取り巻く様々な問題に対して、教員と

しての適切な判断と的確な対応がとれ、実践的指導力と総合的意思決定ができる資質能力を鍛えるための授業である。その教育方法は、学校で生起する内容を取り上げたケース教材を中心とした学生主体の討論型授業であり、話し合いを中心にした協同学習である。

先ず学生は、ケース教材を事前に個人学習をして授業準備をすることが求められる。これは大学で行われる90分授業の他に、教室外での学習を学生に予習という形で与えるものである。予習は、学生の学ぶ意欲を喚起する視点でも重要なことである。学生はケース教材に向き合うことで、自ら学び、自ら判断し、自ら考えて課題を解決する習慣を身に付けることができる。学習の準備を行いやすいように、ケース教材に3つの設問と考えてみようを提示した。学生が準備した学習内容（主として設問に対する学生自身の回答）をケースレポートとして授業当日までに提出することを課した。多くの学生がケースレポートの作成に創意工夫を凝らして取り組んでいる現状である。

ケースメソッド授業は、教職課程を履修する学生のために、小中学校の学校現場で生起している問題をケース教材として取り扱ったものである。学生はケース教材を基にしてグループ討論とクラス討論を繰り返しながら、将来の教員としての実践的指導力を培っていくのである。またケースメソッド授業を通して、学生が自ら考え、ケース教材の内容を討議しながら、自分と他の学生との考えを相互に補い合い、学校における教育問題に対する的確な判断力が修得できるとともに、その後の問題や課題への解決策を実行に移せる行動力を身に付けることを目標にしている。学生は小学校、中学校、高等学校で12年間（約13000時間の授業）を過ごしており、ケースは馴染みがあり、内容についてのある見方、考え方、態度を知らぬ間に体験を通して形成しているのである。でも、そこには将来の教員としてのこれまでの児童生徒の立場とは違った視点で考える必要がある。

教職課程のケースメソッド授業は、ビジネススクールのケースメソッドの理念を授業に取り入れたものである。経営学のケースメソッドによる教育を、教員を目指す学生の教育に応用するものであり、教職課程のケースメソッド授業との呼び方が適切であろうと考えた。

現在の日本は社会経済面における環境が急激に変化している。そうしたなか、経営環境がどのように変化しようとも、「企業は人なり」といわれている。同様に、学校教育においても、「教育は人なり」である。教育の成果は最終的には教員論に行き着いてしまうものである。どんなに立派な施設設備を備え、最先端の教育機器や教材教具を準備しようとも、それを使う教員のソフト面である資質能力が重要である。高尚な理論を学ぶことも大切であるが、より現実的には、学校で生起している教育現場の問題や課題を取り上げて、学生と一緒に解決策を探っていくケースメソッド授業を実践することが必要であると確信している。

#### 4. ケースメソッド授業の特徴

ケースメソッド授業の特徴として次の4点が挙げられる。

第1点は、「楽しく学べる」ことである。ケース教材は、小中学校の現場で普通に見られる問題をもとに作成されている。学生にとってはこれまでの教育実習校での経験や自らの小中学校時代を想起すれば、ケースに記載されている内容は十分に理解できるものばかりである。学生は自らの生活経験を踏まえてケースを考えたり、思いを抱いたりするが、ケースには3つの設問と考えるみようが準備してあるので、それについていろいろな考察をすることが可能になっている。授業での小グループやクラス全体で話し合う場面を通じて、他の学生の意見を知ることにより、ケースの問題に対する理解が深まり、自身の気付きや振り返りなどが促進される面がある。ある時点では、自分の思考傾向の臨界点を超える考えや意見に出会うこともあるだろう。その時には、その学生自身が「なるほど」、「そうか」と実感して納得することができるはずである。

第2点は、「自己表現（アサーティブネス）スキルが修得できる」ことである。ケースメソッド授業を通して、アサーティブな行動として自他の権利を尊重することができるようになる。友だちの発言を傾聴したり、少しずつ自分の意見を発言することで、徐々に自信が持てるようになっていく。そして自分の意見や考えを述べることの不安や心配をなくしていくことができ、自己表現の方法が理解できるようになる。

第3点は、「実践的指導力が修得できる」ことである。教職課程科目を履修する多くの学生は、将来、教職に就きたいと考えており、受講するそれぞれの科目では担当教員の専門性を活かした授業が行われている。そして多くの教員は講義形式で授業を進めている実態がある。一方、ケースメソッド授業は、実際の学校現場をケースとして取り上げ、それについて討論を中心にして授業を進めていく特徴がある。教育実習を経験した学生であれば、ケースに記載してある内容は、よりリアルに実感できるが、教育実習を経験していない学生であっても、将来の学校現場の問題をケースとして取り上げて考えることは、身近な出来事に対する頭上演習としても大いに役立つものである。また教員には実践的指導力が期待されており、学校に勤務したその日から児童生徒を中心にした様々な問題に出会うのである。そして基本的には、自らが一人でその問題に適切に対応してことが求められる。老いも若きも、教職経験の有無に関わらず、教員としての適切で迅速な指導や判断および対応が必要になってくる。まさに出来事に対する実務が行える力量が重視される。このように、教員として備えておくべき資質能力を含めた力量が実践的指導力と呼ばれるものである。そしてこの実践的指導力は教員として実務を遂行していく過程で磨かれて身に付けていくものである。しかし教員による不祥事が発生するたびに、関係者の間では教員の資質能力が取り沙汰されている現実もある。教員養成に関わる大学でも養成段階で、教職員免許取得に必要な教職課程科目の履修単位増加がなされた。現在の複雑な教育課題に対応していくためには、教育や教科の専門家としての資質能力を高める必要があり、教員養成課程を大学院修士レベルに引き上げるという議論が国レベルで行われている。



第4点は、「コミュニケーション力、対人関係スキルが身に付く」ことである。どのような職種の仕事をするにしても、コミュニケーションと対人関係は必要である。こうした能力は、その人となりを決める総合力であり人間力である。これらの力は、その人がこれまで生きてきた生活の環境要因が大きく影響しているといわれる。とはいうもののコミュニケーション力や対人関係力が稚拙であったとしても、それらの力は十分な訓練によって十分に鍛えることが可能なのである。

## 5. 実践的指導力を育成するケース教材

教員に求められる実践的指導力に「専門的知識」と「総合力」があげられる。「専門的知識」は、児童生徒の指導に必要な教科指導など特定領域の能力であり、「総合力」は、教職に関わる物の見方・考え方など教員の資質全体に関わる能力といえる。実践的指導力は、直面する教育問題に対する適切な判断ができ、その問題をうまく解決していける実践力である。実践力はすでに自分の頭の中にある情報やこれから入ってくる情報を様々に組み合わせ、そこから新しい情報を構築していく対応力と考えることができる。また実践力は、現在求められる教員力・即戦力・組織力という言葉で言い換えることができる。この実践力は「専門的知識」のように一定の領域に限定されるものではなく、学校組織を活性化するスクールリーダーに求められるマネジメント力やリーダーシップと考えることもできる。「専門的知識」の修得は、整理され記述された正しい知識を身に付けること、必要なときにその知識や情報を記憶から引き出せる状態にしておくことであるといえる。専門的知識を効率的に修得する教育方法がこれまでの講義形式の授業である。講義形式の授業では教員が専門的な知識や情報を学生に伝達する一方通行の形態をとることになる。

一方、「総合力」は、総合力に関する知識や情報を獲得したとしても、その総合力そのものを有効に使うことはできないのである。この総合力を身に付けるためには、修得している知識や情報を実務で活用する機会を数多く持つことが必要である。実務を多く踏むことで、獲得した知識や情報が生きた力に転化していくのである。「知行合一」との言葉があるが、知っているだけではダメなのである。知っていることを実践・実行してみればじめて知識は生きていく。体験的事実として分かることは、経験を数多く踏むこと、場数を踏むことで知識が有効に働くようになる。この経験を数多く踏むための方法論としてケース教材を活用することが効果的である。

ケース教材を使うことで、学校での問題を自らの問題として、あるいは当事者として考える状況を作り出すことができるようになる。ケース教材をもとに考えることは、未来図をもとに教育を自ら考えて経験することにつながるである。ケース教材をもとに討論を進めることは、自分ではこれまで見えていなかった問題に気付いたり、発想の転換を図る契機になったりするのである。また自分の考えや思考傾向の不備や不十分さを知ることが可能になる機

会を提供してくれる。さらには、他の学生の考えや情報の組み合わせ方や、新しい情報を構築していく力に直接触れることにつながっていく。こうしたことは実践的指導力に要求されるものであるし、討論を経験していくことによって、実践力を高める効果が期待されるのである。

ケースメソッド授業では、自分が構築した考えと他の学生が持っている知識と情報に触れながら知識や情報を対比し、新たに知識と情報を組み立てる力を学習することが可能となっていく。ケースメソッド授業は、学校現場のケースを考える思考プロセスの討論を通じて、問題を浮き彫りにし、学習の促進をめざそうとするものである。

実践的指導力育成のためのケース教材は、授業テーマに関わる小中学校で実際に起こっている問題を事例として考えたものである。ケースで取り上げられた事例のなかで、問題や課題として考えられることは何かについては、事例を学ぶ学生の受け止め方によって違うことが予想される。しかしケースを作成するライターには、そのケースのねらいは何か、ケースを通じて何を訴え、何を考えさせたいのか、ケースに登場する人物の人間関係上に問題点はないのかなど、ケースに関する様々な視点と多様な視角からケースを構成できる技能が求められる。またケースから多くの問題と課題を読み取ることができるとともに、ケースを一つの物語として構成することも求められる。このようなケース教材開発は、その作成に多くの時間と経験を必要とするものである。まずは学生が気軽に読めて設問への答えやすさを考慮し、A4一枚程度のケース教材の作成に努めた。

最終的には、ケースに記載してある問題をどのように解決していったらよいか、学生一人ひとりが自分の問題として考えていける力を培いたいと考えた。換言すれば、今後遭遇する可能性のあるいろいろな出来事に対して、適切な判断と意思決定が迅速にできるようになることを期待した。ケースによる学習は、一定の解決策をマニュアルとして授けるものではない。ケースを通じて、学生が自らどのように考えて判断し、問題解決に向けてどのような具体的行動を起こせるのか、また他の学生の考えや意見を知り、自分で気付いていなかった新たな視点を自らの中に取り込むことができるのか、さらには協議や討論を通じて、自分の考えが修正・変更されながら深化していく過程を実感することである。つまり学習しているその場が、学びを実感する貴重な機会であり、学生が体験しているその瞬間の出来事が暗黙知として会得されるということである。

一方、学生はケース教材を通して、学校現場で起こっている現実の様子を目の当たりにし、様々なことを自ら考えることができるようになる。ケースは具体的内容を物語風にしてあるので、学生には身近なものとして受け止められる。身近であることは、学生が自分を物語の中に投影することが可能になり、自分ならばその問題解決に向けて、どのように対応したらいいのかが分りやすくなる利点がある。さらに同じような問題に対して、どのように行動したらいいのかが意思決定を迫られる場面もでてくる。さらに、ケースを通じて他の学生と協議し

て話し合う行為そのものに価値があることが分かるようになる。このことは、グループ討議やロールプレーなど、体験を取り入れた学習が、学習者にとっては分かりやすいし、学ぶ意欲を高める効果があることからいえることである。こうしたこと以外にも、学生は一つのクラス集団のなかで学習を進めるので、そこには集団力学的な要因やいろいろな人間関係を感じており、自らが望ましい集団づくりに貢献しようと努めることも考えられる。それは、ケースに対する結論を集約する意味で、同じような発言をする危険性はあるものの、逆にそれまでの意見とは全く異なる考えを思いつく機会を与えることにもなる。その意見により、一定の方向に収斂していた結論が拡散していくこともあるだろう。ケースメソッド授業は、ケース教材に含まれる問題について一定の結論へと学生の思考を導いていく役割はあるが、必ずしも結論がでないオープンエンドの場合もあるので、授業ではそうしたこともあってよいと考えている。学生がその場で語られることを実感し、その時自らが何を思い、どう感じ、他の学生がどのような発言をし、それに対してどのような意見が述べられたのかなど、暗黙知の部分も多いからである。

一方、教員を目指す学生にとっては、人間関係の構築や対人関係スキルは最重要課題である。学生の生活空間の大半を占める大学を中心としたコミュニティ社会において、人間関係が不得手であったり、人間関係を避ける傾向が見られる学生がいることも現実である。そのため、就職活動において担当者とのコミュニケーションが十分にできなかったり、面接で尋ねられた内容について、自分の考えをきちんと相手に説明することができない学生も見られる。人とのコミュニケーションや討論、あるいは対話や会話は短兵急に身に付くものではない。気の合った友だちと話はできるが、公式な場面で自らの意見と考えを述べることは簡単にはできないことである。そうしたスキルと態度などは、授業を通して培うことが必要である。これは講義形式の受け身の授業からは期待できるものではない。やはり、討論やコミュニケーションのスキル、人間関係を含む自他の感受性を訓練するには、その育成をねらった授業デザインを構築していかなければならない。教職に就けば、児童生徒をはじめ保護者や地域関係者など、様々な人々との出会いが始まり、そうした人たちとのつながりと望ましい人間関係の中で、教育指導を進めていかなければならない。教員と児童生徒および児童生徒同士の好ましい人間関係を構築するには、その基礎的な部分を大学教育で担う必要がある。人との関係は経験を通して徐々に修得されるものである。経験は力ではあるが、そうした場を意図的・計画的に設計するのがケースメソッド授業の役割である。

## 6. ケースメソッド授業の進め方

ケースメソッド授業は、学校での実際の出来事が書かれた事例（ケース教材）を討議する形式で授業を進めるものである。その事例に対し、自分は教員として、あるいは指導者としてどのように考え（意思決定し）、どのような計画を立て、児童生徒を指導するのか、その思

考過程を繰り返し訓練することが目的である。

学校現場では、教員には教育上の問題や課題を明らかにし、その問題や課題に対して適切に判断して解決する実践的指導力が求められる。実践的指導力は、教職に対する使命感と熱意、児童生徒への愛情などを基盤とした、必要な専門的知識と問題解決力、意思決定力と実行力などの総合力である。そういう意味では教員自身の「生きる力」といえる。生きる力は、児童生徒に求められるばかりではなく、指導者である教員にも必要なものである。他にも、国際性、コミュニケーション、リーダーシップ、調整力、人間力など教員に求められるものはたくさんある。こうした教員に必要な資質能力のうち、主として問題解決力、意思決定力、実行力などの総合力と実践的指導力を訓練する有効な教育方法がケースメソッド授業なのである。

ケースメソッド授業におけるケース教材は、学校における実際の出来事が記述されている資料を指す。討論テーマを考える際の内容を提供する資料といえる。ケースメソッド授業は、事例や討論テーマを中心にした討論・協働・参画・双方向型の学生主体型授業であり、学生の将来に具体的恩恵をもたらすものといえる。

例えば教員採用試験では、集団討論や集団面接あるいは模擬授業などが課せられている。それらの場面では、自らの考えを明確に述べることや、他の受験生の意見を取りまとめて与えられた課題の結論を導く力などが試されるのである。また児童生徒に接した際に、どのような対応や指導ができるかについて、具体的な生活場面における課題が与えられ、その課題に対する指導を考えた後に、その場面指導を演じることが求められる。

集団討論では都道府県により多少の違いはあるものの、8人程度のグループに一定の課題が与えられる。その課題に対して各自10分程度で自分の考えをまとめ（メモする）、その後、グループの各自が1分間で自分の考えを発表した後、30～40分程度で課題について討論して協議を深めることが問われる。

ケース教材には、具体的事例や討論に関わる内容等が書いてあるので、学校現場の課題を考える多くのヒントが得られる。ケースメソッド授業では、理論や知識を覚えるのではなく、討論を通じて必要な総合力とスキルを体感することが重要となる。知識理解に関する内容は、個人学習のときに自ら調べておくことが必要である。予習をすることで、自ら考え、自ら課題を解決していく力が付いていくのである。個人学習を続けていけば、ケースレポートを作成していく過程で、いろいろな力が付いてきていることが実感できるのである。

なぜケース教材を使用するかといえば、①具体的な事例なので考えやすいからである。次に②自分ならどうするかの実行が容易にできるようになるからである。また、③問題は何か、問題はどこにあるかが分かりやすいからである。さらに、④課題は何か、⑤解決策は何か、⑥何を基準や根拠にして、意思決定するのが理解できるようになるからである。⑥将来の出来事に適切な対応が可能になり、⑦心の準備や余裕が持てるようになるのである。

ケース討論の目的は、① Collaboration (協働) と Dialogue (対話) である。②新たな知識を得るために (知の創造)、これまでに学んだ経験・知識・直感を使って考えていくのである。③学校での即戦力、実践的指導力、教員力、組織力、使命感、総合力などを培うことができる。

この授業で得られるものは、①自分の意見や考えが発言できるようになること。②相手の意見や考えが分かり、相手を理解して相手の話を傾聴できるようになること。③自分が今まで気付かないことを発見したり、新たな発想ができたりするようになること。その結果、④知識、理解力、思考力、判断力などが深化すること。⑤コミュニケーション力と表現力が向上すること。⑥教員採用試験での討論や面接にも役立つことが期待できること。そして最終的に、⑦総合的な人間力の育成と訓練が行えることである。

## 7. ケースメソッド授業の実際

授業の流れは、おおむね下の表に示したパターンで進められる。出席確認後、代表グループによるケース教材のプレゼンを行った後、各班でケース教材についてのグループ討論を行う。その後にクラス全体でケースの設問や問題点を出し合い、教員の方からクラス全体に発問をしたり、ケースの解説とまとめを行う。最後に授業評価アンケートを実施して授業の振り返りを行うようにしている。

ケースメソッド授業の流れ

授業の流れ	時間配分	内 容
出席確認	5分	・呼名、配布資料確認、連絡事項
代表グループのプレゼン	10分	・ケース教材の設問を中心に発表、プレゼン資料準備
グループ討論	30分	・テーマをしばって討論、対話、協議
クラス討論	30分	・各班の討論テーマを中心に協議と解説
まとめ	5分	・設問についてまとめる
授業の振り返り	10分	・授業アンケートを行い集計する

### ① 授業前準備

○班編成 (机を並べ替えグループをつくる)

○グループ分け (カードで班を決める)

○配布プリント (プレゼンシート、優れたケースレポート、ティーチング・ノート、ケース関係資料)

授業開始前には、当番学生たちがすぐに授業が開始できるように準備をしている。各班の

グループ人数は6人とし、教室に来た学生から順にカードを引いて、自分のグループ番号の座席に座る。本配布の資料は各自が取っていく。発表グループはパソコンとプロジェクターを教務課に借りに行き、プレゼン準備をする（発表資料は印刷して配布する）。

教室の班編制



## ② グループ討論の方法

授業前半のグループ討論（小集団学習）では、1グループ6人で班編制を行う。各グループでは、司会進行係（コーディネータ）、記録係（一定形式の記録用紙あり）を決める。班メンバーは毎回変わるようにした。メンバーが変わることで、今まで話したことのない学生同士が討論をすることになり、顔見知りでない学生同士がコミュニケーションを図っている対人スキルが求められる。コーディネータは、ケース教材での疑問・質問をはじめ、各自の意見を取り上げ、自由に発言できるような手腕を発揮することが役割である。コーディネータになったら、そうしたスキルを鍛えていくことが大切であり、これは教員採用試験での集団討論場面でも役立つものである。各自が日々の授業の中で、こうした資質能力を磨いていけるように取り組ませることは重要である（採用試験真近で練習するよりもはるかに効果が得られる）。なお、コーディネータ役、記録係は、毎回輪番制にしている。さらにグループ編成もメンバーが毎回変わるようにルールを最初に決めておく必要がある。グループ討論は、ケース教材の3つの設問を中心に進めている。各自の解決策や考えを発表し、意見を可能な限り引き出すことが求められる。記録係は、後のクラス全体での討論で、各グループ内で、どのような意見が出たかについて、自らの言葉で簡単に報告（1分以内）できるように、自分でメモをしておくことも大切である。

グループ討論を活性化するために、協同学習の原則や約束を最初に決めておく必要がある。グループでは初めて顔を合わせて話し合うメンバーもいるので、討論に入る前にアイスブレイクの意味を込めて簡単な自己紹介をしたり、討論をしたいと思う内容を簡潔に述べてもら

うこともよい。具体的には、まず、各自が1分間で討論内容を考える。次の1分間で各自が考えた内容を述べていく。その後、コーディネータは、討論テーマを一つ決めてからその内容についてグループ討論を始める。グループ討論が思うように進まない場合には、自分のレポートを発表することで、討論がやりやすくなることがある。

### ③ クラス討論の方法

グループ討論の時間が終わったら、次にクラス全体でケースを考える時間になる。この時間は、教員がインストラクターとしての役割が大きくなる。ケース教材の設問を中心に全体に問いかけていくとよい。最初の頃は、各班のコーディネータから、話し合った概要を発表してもらったが、それをしているとクラス討論の時間がなくなっていく。各班での討論内容を知るために、グループ討論中に、討論テーマを書いた紙を黒板に掲示してもらおう方法がよい。テーマを記載する紙はB4版でマジックで大きく書いてもらうとよい。掲示された各班の討論テーマを類型化しながら、クラス全体の討論や説明・解説にスムーズに移行できる利便性がある。そのテーマを見ながら各班の回答を求めたり、その回答に対する他の学生の意見を発表することで、グループ討論の内容がクラス全体に共有されるようになる。最後は、ティーチング・ノートを使ってケースのまとめをしていく。

### ④ ケースメソッド授業の留意点

○学生は、授業前にケース教材をよく読んでおき、ケースで問題だと思ったことを自分で考え、それに対するコメントを書いておく。また「設問」、「考えてみよう」、「キーワード」等を中心に事前学習（予習）をしておくことが大切である。

○設問は3つあるが、それ以外にもいろいろ考えられる。そうしたことは、グループ討論やクラス討論で出してもらえば、授業中に簡単なコメントができる。

○ケースメソッド授業では、結論を出すことが目的ではない。結論がでないオープン・エンドのこともあるが、それはそれでよいのである。授業のその場で考え、他の学生の意見や考えを知り、「なるほど」と思ったり、「○○さんの意見はいい」、「それは自分では気付いていなかった。そういう見方もあるのか」、「でも、それはちょっと無理なのではないのかな」など、今、その場の教室の空気、人間関係などを肌身で実感することが大切である。いわゆる暗黙知の領域にある何かを感じることである。その学習に参加していないと分からないことが沢山ある。こうした授業のやり方は、きっと後々、役立つと思う。例えば、民間会社の就職試験や教員採用試験での面接や集団討論では、自分の考えを的確に述べる必要がある。ケースメソッド授業はその実施訓練と思って、積極的に自分の存在感を出すようにする。

○ケース教材を通して、自宅で事前に自ら考え準備し、大学でグループ討論やクラス全体で話し合うことで、学校の組織人の一人としての思考力、判断力、コミュニケーション力、人

間力などの総合的力量と実践的指導力が培われる訓練になっているのである。

○設問で「考える」、「討論する」、「話し合う」などを通して、「どのような問題があるのか」、「どうした方がいいのか」、「指導はどうするのか」、「自分は何をするのか」、「担当教員とどう連携するのか」、「保護者への対応は何か」、「関係機関（地域の団体、市教委、PTA 役員、警察、児相など）との連絡や連携は」、「他の教員との連携」、「児童生徒および保護者の信頼を得るには」など、多くの具体的事項・内容が提起されることになる。

## 8. ケースメソッド授業の効果

ケースメソッド授業はケース教材を用いて討議形式で授業を進めていく教育方法である。この授業の前半は、各班6名程度のグループ討論のなかで、学生はお互いに意見を述べあつて授業が進められていく。学生はグループ内で自分の考えや意見を話すことが要求される。また自分の考えが補充・深化・充実したものとなるように、他の学生の考えと意見を傾聴することが必要になってくる。他の学生の考えや意見を聞くことで、自分の思考プロセスに不足している部分に気が付き、新たな視点を発見することができる。他の学生の発言を受けて、自分の意見がより明確になったり、思考の組み立て方が変わったり、新たな情報を構築したりすることが可能になる。さらに新たに構築された自らの考えや意見を発言することで、別の学生の意見や考えに刺激され、新たな考えや意見の発見があつたり、各自の考えや意見が集約されることもある。

このようなケースメソッド授業で討論をするという状態は、お互いの思考プロセスを観察学習している状態として説明することができる。自分の意見を発言することは、勇気が必要とするが、「案ずるより産むが易し」である。この諺は、「出産を目の前にした妊婦は何かと心配が先に立つものだが、生まれてしまえば、案外たいしたことはなかった。取り越し苦労にはおよばなかった」という意味である。だから学生は発表しようかどうしようかと、いろいろ頭の中で迷うこともあるが、とにかく思ったことを言葉に出せるように指導していく必要がある。自分の発言が他の人からどのように思われるだろうかなど、気にかける必要はないのである。発言することで、自分でも気付かなかつた自分に出会うことがある。発言や発表は、自分の思考プロセスを他の学生に言語で表現することであり、これはコミュニケーション力を培う視点からも重要なことといえる。お互いの思考プロセスを討論することを通じて、学習しあうことが可能になると考えられる。

ケースメソッド授業では、学生は討論することで情報の組み立て方のまずさに気づいたり、自分以外の学生が持つ様々な情報の組み立て方に触れることで、自分自身の情報の組み立て方を再構築することができるようになる。



## 注

- (1) 川野司「教職課程におけるケースメソッド」九州女子大学紀要 第48巻2号 2012年1月
- (2) 竹内伸一『ケースメソッド教授法入門』慶応義塾大学出版社 2010年11月3頁
- (3) 川野司「構成主義に基づいた大学授業論考」九州女子大学紀要 第50巻1号 2013年9月
- (4) 坂井正廣『経営学教育の理論と実践』文眞堂 1995年4月 iv頁
- (5) 佐藤三郎編著『人間関係の教授法』明治図書 1963年3月
- (6) 安藤輝次『学校ケースメソッドで参加・体験型の教員入門』図書文化社 2009年6月  
百海『ケースメソッドによる学習』学文社 2009年7月
- (7) 川野司「小学校教員志望の学生が重視する教員に必要な資質能力」九州教育経営学会紀要 第19号 2013年6月

## **Study of Case Method Teaching**

Tsukasa KAWANO

Department of Education and psychology, Faculty of  
Humanities, Kyushu Women's University

1-1 Jiyugaoka Yahatanishiku, Kitakyushushi Fukuoka 807-8586 Japan

### **Abstract**

The case method teaching, I can be summarized in the following eight points. Learn how to determine itself to the problem by using a case in the first , to deal . On the basis of the case, it will promote the class to go dialogue and debate and discussion in the second. Is the participation and interactive lesson in the third, it is a student subject type class. Is a matter discovery learning in the fourth, I will continue to learn how to go to solve it. Through discussion ( discussion and debate ) , I will continue to co-create a new wisdom in the fifth. It aims at the acquisition qualifications, potential, practical leadership, collective strength as a teacher in the sixth. It is that accurate judgment can be for events to meet future, and respond appropriately to the seventh, and aims to foster competence that can guidance with confidence. According to the evaluation of teaching by students, case method teaching is concluded that the method of teaching satisfaction to tackle the ambitious to have the interest is high.